

WAḤDAT AL-WUJŪD ACCORDING TO ‘ABD AL-GHANĪ AL-NĀBULUSĪ: EXPLANATION TO THEORETICAL LINKAGES AMONG ONTOLOGY, ACT THEORY AND SUFI PRACTICE

ナーブルスィーの存在一性論
—存在論、行為論、修行論の理論的つながり—

NAOKI YAMAMOTO*

ABSTRACT

This study aims to show how ‘Abd al-Ghanī al-Nābulusī (1641-1731), a prominent Syrian Islamic scholar in the seventeenth and eighteenth centuries, teaches Muslims to overcome their ego through various disciplines. This paper will focus on his ontology, theology and sufi practices. In ontology, al-Nābulusī explains the reality of being from a perspective of Waḥdat al-Wujūd (unity of being). According to al-Nābulusī, all beings in the world have no actual existence, but only Allah has true existence. Other beings can exist through Allah’s existence. He insists that this is the reality of being which all Muslims must understand and believe in. Furthermore, his idea of existence is not limited in the field of ontology, but also in the field of theology. Al-Nābulusī discussed the topic of human agency with Ibrāhīm al-Kūrānī (d. 1616-1640), a prominent Islamic theologian in Medina. Al-Kūrānī claimed that human power can influence (ta’thīr) actions with the permission of Allah. However, al-Nābulusī disagreed, holding on that only Allah has the power to create actions. This follows from al-Nābulusī’s ontology: as Allah is the only true Existent, so He is the only true Agent. Finally, even in his treatise on Naqshbandī practices, al-Nābulusī developed the meaning of its practice based on his ontology. Al-Nābulusī explains that silent remembrance of Allah (dhikr khafi), which is regarded as one of the most important practices for the Naqshbandī, is a way to overcome our ego and experience true reality. This paper demonstrate how al-Nābulusī repeatedly emphasized the oneness of Allah in various kinds of Islamic sciences and practices.

Keywords: *Waḥdat al-Wujūd*, Oneness of Allah (*tawḥīd*), Islamic Theology, Sufi Practice, ‘Abd al-Ghanī al-Nābulusī, tasawwuf

I. はじめに

「アッラー以外に神はいない (lā ilāha illā Allāh)。」アッラー以外のあらゆる神を否定することはイスラームの根本原理を為す。イスラームにおいてはアッラーこそ唯一絶対なる創造者にして崇拜の対象であり、「神の御顔以外のものは全て滅びる」(クルアーン28章88節)とあるように、被造物は永遠なる存在のアッラーの前では時の中に朽ちていく儚き存在ではない。そのような芥の如き被造物を創造主として崇めたり、アッラーに並ぶような崇拜の対象として信仰したりすることは多神崇拜 (shirk、以下シルクとする) と呼ばれ、イスラームにおいては何よりも重い大罪である。古今東西イスラームの思想家達は神学や哲学、神秘思想などあらゆる方法論をもってこの「神の唯一性 (tawḥid)」の教えの精髓を説き、シルクを遠ざけることを目的としてきた。しかし一方でイスラーム神秘思想史には、このタウヒードの教えに一見真っ向から反しているかのような挑戦的な思想潮流が存在する。それは存在一性論学派と呼ばれる、13世紀アンダルスに生まれた秘思想家イブン・アラビー (Ibn 'Arabī, 1165-1240) が提唱した存在一性論 (Waḥdat al-Wujūd) を奉ずる学者達の系譜である。存在一性論はイブン・アラビーの死後も彼の高弟であるサドルッディーン・クーナウィー (Ṣadr al-Dīn al-Qūnawī, 1207-1274) らの功績によって多くの支持者を獲得し、オスマン朝期にはウラマーのほぼ全員は何らかの形で存在一性論の影響下にあると言われるまでに至った。しかしながら万物は全てアッラーの自己顕現・自己流出の結果であるとする存在一性論の存在論は、ともすればイスラームにおける禁忌たるシルクを犯す汎神論につながりかねない。過去にはアフマド・イブン・タイミーヤ (Aḥmad ibn Taymiya, 1258-1326) などから激しい攻撃を受けたが、特に17世紀から18世紀初頭にかけてオスマン朝下のイスタンブルを中心に起こったイスラーム復古運動カドゥザーデ派 (kaḍızâdeliler) の思想家達はイブン・アラビーの思想を異端として激しく攻撃し、存在一性論学派の思想家達と激論を交わすに至る。そして存在一性論の正統性を巡る思想的対立はオスマン朝下のアラブ地域をも巻き込むことになる。

本稿では、アブドゥルガニー・ナーブルスィー ('Abd al-Ghanī al-Nābulusī, 1641-1731) の思想に着目したい。ナーブルスィーに着目する理由は二つある。第一に、彼は同時代のアラブを代表するイスラーム学者であったが、なかでもイブン・アラビーの思想の擁護者として知られている点である。カドゥザーデ派の思想的影響はイスタンブルからダマスカスにまで及び、イブン・アラビーの信奉者であったナーブルスィーは存在一性論などスーフィー達の思想・実践が如何にイスラームの正統信条に則ったものであるかを証明する必要にかられた。存在一性論学派はイブン・アラビーの思想を奉ずる学者サークルであるが、イブン・アラビーの記述はしばしば非体系的、非論理的であるため、存在一性論理解も個々の学者たちの

解釈によって大きく異なる。存在一性論の解釈の多様性を示すため、存在一性論批判の中心地イスタンブルから離れたダマスカスにおけるナーブルスィーの存在一性論の解釈を明らかにする必要がある。第二に、存在一性論をめぐる解釈の多様性だけでなく、存在一性論が学問領域に横断的に及ぼす影響を明らかにするために、多くの分野で著作を残したナーブルスィーに着目する。なぜならナーブルスィーは200点以上の著作を残しているが、存在一性論を扱った論考に加え法学や神学、道徳論から旅行に至るまで様々なジャンルの作品を残しているからだ。

本論の構成は、まずナーブルスィーが存在一性論を如何にイスラームの正統的思想として位置づけようと試みたのかを探り、彼の存在一性論理解の基礎を明らかにする。次に、ナーブルスィーの神学議論、スーフィー修行論に彼の存在一性論理解がどのように影響を与えているかを考察する。

II. ナーブルスィーの存在論—イブン・アラビー学派の立場から—

本章ではまずナーブルスィーが『存在一性論の意味が意図するものの解明 (Īdāh al-Maqṣūd min Ma'nā Waḥda al-Wujūd) (以下、『解明』とする)』においてどのように存在一性論を擁護しているのかを確認し、彼の存在一性論理解を見てみたい。彼の著作には存在一性論の正統性を論じた著作がいくつもあるが、中でも『解明』は小品ながら彼の存在一性論理解が平易に説かれている。

『解明』では存在一性論を批判する者達が如何に浅はかであるかが力説されている。まずナーブルスィーは存在一性論を批判する者達を以下のように批判している。

それ(存在一性論)を否定する者たちは、存在一性論者におけるその意味を理解していないため、間違った意味でそれを想像しているのだ。……彼らの[存在一性論に対する]否定とは実のところ、間違った意味である彼らの理解に基づいているのであり、この問題(存在一性論)に基づいているのではない。彼らは虚偽を[自分たちで勝手に]想像し、その[虚偽を]否定しているのだ。

ナーブルスィーは、存在一性論自体には克服すべき何らかの思想的欠陥や逸脱はなく、批判者たちが存在一性論を誤って理解しているに過ぎないと言う。彼は正しい理解に基づいて知れば存在一性論はスンナ派の正統信条に基づいていることが分かったと説いている。そして彼は存在一性論を擁護しているだけではなく、存在一性論を理解することは全てのムスリムがイスラームを理解するために必要不可欠なのだと言っている。

純正な、長たる導きの師達の道以外に道はない。責任能力を負う者 (mukallaf) は全てそれ (存在一性論) を学び、完全な方法に則って解し、固持し、それ以外の神学者たちの言葉を退けなければならない。なぜならそれは真の言葉、正しき信条であり、また批判者達の批判や無知な者達やそれについての知識を持たない神学者、迷い迷わす者達の非難からそれを守らなければならないからである²。

松本も指摘しているように、『解明』では存在一性論でしばしば用いられる存在の諸次元構造が用いされていない。存在の諸次元とは、アッラーの存在が唯一絶対の一たる次元の否定的一性 (ahādīya) 始点として、統合的一性 (wāhidiya)、霊的存在や物質界であるムルク界 ('ālam al-mulk)、ジャバルート界 ('ālam al-jabarūt)、マラクート界 ('ālam al-malakūt) □へと下り森羅万象へと自己顕現するプロセスを描くものである。ナーブルスィーは他の著作では複数の次元を用いてアッラーの自己顕現を説明することはあるものの、彼が存在論を説く際には常にアッラーと世界 (及び人間) の二分法が強調される。ナーブルスィーは世界とアッラーの存在の違いについて以下のように論じている。

諸世界すべては、それ (諸世界) 自体の側から見ればその根源的無によって非存在 (ma'dūm) である。一方、アッラーの存在から見れば、それ (諸世界) は至高なるかの御方 (アッラー) の存在によって存在している。アッラーの存在と、かの御方の存在によって成り立つその (諸世界の) 存在は、一つの存在である。しかしながらそれはただア

- 1 カドゥザーデ派については、Necati Öztürk, "Islamic Orthodoxy among the Ottomans in the Seventeenth Century with Special Reference to the Qāḍī Zāde Movement" (Ph.D. diss., University of Edinburgh, 1981); Semiramiş Çavuşoğlu, "The Kāḍizādeli Movement: An Attempt of şerī'at-minded Reform in the Ottoman Empire" (Ph.D. diss., Princeton University, 1990); Madeline C. Zilfi, "The Kadizadelis: Discordant Revivalism in Seventeenth-Century Istanbul," *Journal of Near Eastern Studies* 45 (4), (1986): 251-269を参照。
- 2 ナーブルスィーの概説書としては、Elizabeth Sirriyeh, *Sufi Visionary of Ottoman Damascus: 'Abd al-Ghanī al-Nābulusī, 1641-1731* (New York: RoutledgeCurzon, 2005); Samer Akkach, *'Abd al-Ghani al-Nabulusi: Islam and the Enlightenment* (Oxford: Oneworld Publications, 2007)が存在する。

ッラーの存在なのである。諸世界にはそれ自体の側からみれば存在は根本的に無いのだ。

永遠なる一つの存在 (アッラー) はそれ自体によって成り立ち、生成消滅する [存在は] 永遠なる [存在] によって成り立つ。一つの存在は永遠なるものであれば、それを超えるものはない絶対無限定の存在である。生成消滅するものであれば、……限定された存在である³。

ナーブルスィーによれば、諸世界、即ち現世に存在する被造物の存在は「アッラー／被造物」どちらの側から見ると存在・非存在かが分かれるという。すなわち、被造物はたしかに世界の中に存在しているものの、それ自体によっては存在していない。被造物自体はどれだけ突き詰めてもその根源である無に行きつくだけである。なぜなら 被造物の存在は常にアッラーの存在によって支えられているのである。

またナーブルスィーはアッラーと被造物の存在の関係性を、水とその色を譬えに説明している。例えば水に黒辰砂を加えれば黒色の水となり、辰砂を加えれば赤色の辰砂となる。しかしこのとき水そのものが黒色や赤色になったのではない。また黒色の水は黒色と水という二つの存在があるのではない。黒色はそれ自体では存在することができず、水に黒色が付加され、黒色の水として存在することによってはじめて目に見えるものとなる。ナーブルスィーによれば「被造物の存在」とは、この「水の色」のようなものである⁴。あくまで本当に存在しているのはアッラーであり、被造物はアッラーの存在によって存在物 (mawjūd) となっているに過ぎない。つまり彼が存在と呼ぶものはアッラーの存在だけであり、被造物の存在 (wujūd) が指しているものも、被造物を存在せしめている真の存在を指していると理解しなければならない。人間の存在はアッラーの存在によって支えられているならば、なぜ人間の存在は儚く有限なのであろうか。ナーブルスィーによれば、それは空に浮かぶ星が、それを見る人間から遠く離れているために本来とても大きいはずなのに小さく見えるのに似ているという。つまり我々の存在の儚さは、アッラーの存在から我々が如何に遠く離れているかを示しているのである。

- 3 'Abd al-Ghanī al-Nābulusī, *Īdāh al-Maqṣūd min Ma'nā Waḥdat al-Wujūd* (Cairo: Dār al-Āfāq al-'Arabīya, 2008), p. 56.
- 4 カイロ版では「第二の (thānī) 方法に則って」となっているが、文意に鑑みスレイマニエ図書館のHalet Efendi写本を採用した。'Abd al-Ghanī al-Nābulusī, *Īdāh al-Maqṣūd min Ma'nā Waḥda al-Wujūd* (MS. İstanbul: Süleymaniye Kütüphanesi, Halet Efendi 759) 105a.

本来の大きさが変わっているわけではないのにも関わらず、大地にいる人間からは小さく見える夜空の星に似ている。もしその大きさが反対のもの一遠さによる小ささ一として見えたとしても、それ（星）の本来の大きさが変わっていることにはならない。変化 (taghayyur) や変換 (tadbīr) は有限な本質とその形象に生じる。アッラーはそれらをお望みの通りに変化させ、根源的無から付随的存在へと移し、それ（有限なもの）に適した境界をもって称賛される御方（アッラー）の存在によって形容される⁵。

ナーブルスィーの存在論は以下のようにまとめられる。第一に独立・自体的に存在することができるのは、永遠存在であるアッラーだけである。第二に被造物はアッラーの存在に支えられることによってはじめて存在することができる。そして被造物はアッラーの存在によって支えられているという認識を忘れ、自らの存在を見つめるだけでは「存在していない」というのが最も重要な点である。ナーブルスィーの存在論では、被造物の存在は「アッラー／被造物」どちらの側面から見かによって「存在／非存在」が変わる。人間はみずからを存在せしめている真の存在、即ちアッラーを知ることによって、はじめて自らの存在の在り様を理解することができるのだ。つまり人間は真に自分の「存在する」ためには自己の視点を克服し、アッラーからの視点を通して自らを見る必要がある。

III. ナーブルスィーの行為論—神学的立場から—

ナーブルスィーの存在論で強調されているのは、アッラーの存在の絶対性と被造物たる人間の根源的無である。しかし、あくまで本当に存在しているのはアッラーのみであるならば、人間はその行為においていかなる主体性も持ちえないのであろうか。

ナーブルスィーは上記の問題に対し、17世紀マディーナのイスラーム学者イブラーヒーム・クーラーニー (Ibrāhīm al-Kūrānī, 1616-1690) とかつて論争を行ったことで知られている。イブラーヒーム・クーラーニーは17世紀ハラマインのイスラーム改革ネットワークの中心的人物であり、イブン・アラビー学派でありながらイブン・タイミーヤの再評価を行った稀有な学者である⁶。さらに彼はアシュアリー学派の立場からいくつかの神学テーゼを提唱したこ

⁵ Al-Nābulusī, *Īdāh al-Maqṣūd*, 59.□.

⁶ 松本耿郎「アブドゥルガニー・アンナーブルスィーの『存在一性論』について」『サピエンチア』第31号 (1997年2月): 435.

とで知られている。そのうちのひとつとして、彼の著作『正しき道 *Maslak al-Saddād*』において提唱された「人間の力は独立してはおらず、アッラーの許可によって影響力を持つ」というテーゼがある⁷。ここでの力 (qudra) は人間の行為を生み出すことに関わる力のことを指す。一見人間の主体性を否定し、あくまでアッラーの許可によって人間の行為は生起することを説いているように見えるテーゼだが、ナーブルスィーはむしろ上述のテーゼはアッラーの主体性を否定しているものだと批判の手紙『人間の行為の創造の問題についての親密な繋がり活性化 (*Tahrīk al-Silsila al-Waddād fī Mas'ala Khalq Af'āl al-'Ibād*)』(以下、『活性化』とする) をクーラーニーに送った。

ナーブルスィーによれば、影響力 (ta'athīr) とは行為を直接創造することのできる力を指す言葉であり、「たとえアッラーの許可によって」との条件が付されていたとしても、「人間の力は影響力を持つ (qudra al-'abd muaththira)」と言うことは、人間の力は行為を直接創造することができるという意味になってしまう。ナーブルスィーはあくまで行為の創造者はアッラーであることを強調している。彼は存在一性論における存在顕現説を踏まえながら、一見人間の力にみえる行為も、アッラーの力が状況・環境に応じて自己顕現した結果に過ぎないという⁸。ナーブルスィーは行為の創造・選択におけるアッラーと人間の力の違いを太陽と月の光を例に説明している。

人間の力という [アッラーの力] の跡によってそれ (アッラーの力) は隠されてしまっているのである。諸存在の夜に現れているのは人間の力 [という] 月であり、諸存在の夜の中に隠れているアッラーの力 [という] 太陽の現れを、[月は] 光って隠れてしまっているのである⁹。

月が光っていたとしても、それは太陽の光を反射しているに過ぎず月は自体的に光っているわけではない。自体的に光っているのは太陽であり、月の光は太陽の光によってはじめて存在している。人間が行為を選択しているのは、この月の光のような見かけ上の現象であり、真の主体はあくまでアッラーにあるのである。選択的行為の全てにおける影響力 [を行使できるの] は至高なるアッラーの力だけである。上述の通り、人間の力 (はあるという思い込み) は、真の行為主体はアッラーであるという真理を覆い隠してしまっている。また一方でナーブルスィーは、人間は行為を創造することは決してできないものの、シャリーアによる命

⁷ 存在一性論学派の各論者によってムルク界、ジャバルート界、マラクート界が何を司るのかは異なり、定義は一定していない。

⁸ Al-Nābulusī, *Īdāh al-Maqṣūd*, 60.

⁹ Al-Nābulusī, *Īdāh al-Maqṣūd*, 62.

令・禁止に関わる行為については、人間の行為として帰されると述べている。

我々の行為である善行・悪行すべては至高なるアッラーが我々に関連付けて創造したものである。その（善行・悪行）は真に我々の行為であり、至高なるかの御方の行為ではない。至高なるかの御方の行為とは、我々[の存在]と我々の行為であり、我々の行為だけではない¹⁰。

すなわち、存在論的真理においては人間の行為は究極的にはアッラーに帰されるものの、あらゆる行為において人間は意志のないからっぽの受動的存在ではないのである。ナーブルスィーは別の神学的論考『選択的部分行為の真理についての巡る惑星 (*al-Kawkab al-Sāri fī Ḥaqīqa al-Juz' al-Ikhtiyāri*)』(以下、『惑星』)において、行為主体性において人間と他の存在物には存在論的次元の違いがあると述べている。

このような観点からアッラーから人間に対する発話があり、そして命令と禁止の義務負荷が[人間に]生じる。なぜなら人間だけが存在において第二段階に属し、全ての(他の)存在物 (*mawjūdāt*) は存在において、第一段階である別の段階に属しているからだ。

あらゆる事象の主体はアッラーに属し、創造物は独立主体的に何かを行うことはできない。しかしながら、人間はある面においてアッラーの命令に服するだけの他の創造物とは決定的に異なる段階に属する。それはアッラーからの命令と禁止に対面するとき、即ちシャリーアに則って己の行為を選び取るときである。『活性化』でもナーブルスィーは「行為の主体はシャリーア的に真に人間に属し、言語的に真にアッラーに属す」と述べている。

しかし上記のような行為主体性を巡る存在論的真理を理解するためには、ナーブルスィーは神学的思考の積み重ねでは不十分であると考えていた。

我々が述べたところの叡智を理解するには、光に満ちた心、主性の神秘の心の徒である正しき導師達と共に過ごし、神的知識の師達の教話 (*ṣuhba*) の場に絶えず身を置き、いついかなる時も彼らに外面においても内面においても反抗することなく、心的状態や発言に従い、彼らを信じながら彼らへの奉仕において誠実さを持つこと……以外に道はない。

10 Ibid., 63.

ナーブルスィーは『活性化』や『惑星』において、人間の行為を創造するのはあくまでアッラーであることを強調している。真の独立した主体はアッラーのみであるとする考えは、自体的に存在することができるのはアッラーのみであり、人間はアッラーの存在に支えられることによって存在しているに過ぎないというナーブルスィーの存在論に通底する。しかしながらアッラーの命令と禁止に対面する限り、人間は真に行為者として存在する。ここからナーブルスィーはシャリーアという規範が人間に主体性を与え他の被造物から区別される重要な鍵であるとみなしていることが分かる。

しかしより重要なのは、アッラーの存在や人間の行為主体性を理解するためには、論理的思考ではなくスーフイーの導師の許で修行を積むことが必要なのだと説いている点である。このことから、ナーブルスィーは存在論や行為論を神秘哲学や神学の立場から論じることとはあっても、あくまでスーフイーの修行という実践のなかで真理は体感的に習得するものだと考えていることが分かる。

IV. ナーブルスィーの修行論—ナクシュバンディー教団の立場から—

ナーブルスィーによれば、イスラームにおける信仰の精髓は、アッラー以外に真に独立して存在するものはないと知ることにはほかならない。そして、その真理を理解するためには、神学的議論だけでは十分ではなく、スーフイーである導師の指導を受けながら修行を積むことが必要であるという。本章では、ナーブルスィーのナクシュバンディー教団の修行本を用いて、彼の修行論が上記の存在論的真理の理解と本当に密接な関わりを持っているのかを確認してみたい。

オスマン朝期のウラマーにとって複数のイスラーム神秘主義教団(タリーカ)に出入りすることは珍しくなかったが、ナーブルスィーもその例にもれずカーディリー教団とナクシュバンディー教団という二つのタリーカに入門していた。ナーブルスィーはナクシュバンディー教団の修行書『(アッラーに) 従う者の鍵 (*Miftāḥ al-Ma'īya*)』を残している。本書はナーブルスィーが属するナクシュバンディー教団の霊的系譜 (*silsila*) と、ナクシュバンディー教団独自の修行法である「11の言葉 (*iḥdā 'asharat kalima*)」の解説を含んだ様々な修行法、作法 (*ādāb*) 論を含むさまざまな修行論の解説に分かれる。本章では、修行法のなかでもナーブルスィーがタウヒードとの関係性を強く唱えている作法論と祈祷論に注目する。

4-1. 作法論

スーフィー教団は決して特定の人間しか行うことができないような特別な修行法だけを説いているだけではない。むしろ、出家制度も存在しないムスリム社会ではスーフィー教団も日常の中で生きることを想定して様々な倫理や道徳論を説いている。特により良きムスリムとして生きる心構えや所作を説く作法論は、スーフィー教団の導師達によって論じられてきた。『鍵』でも修行者が日常において守るべき作法論に多くのページが割かれている。まず、アッラーとの関係において守るべき外面・内面の作法についてみていく。第一に、修行者は常にアッラーによる命令と禁止を守り、教友たちの行跡に倣うことが求められる¹¹。外面の行為を正すことによって、内面の心も磨かれることとなり、嫉妬や憎悪、怒りなどの悪感情から解放され内面的清浄さ (ṭahāra bāṭiniya) が養われる。そして常に自己の内面の心の状態と外面の行いを反省し、アッラーに許しを求めなければならない。第二に、ナーブルスィーは内面の作法について説いている。内面の作法では、全ての他者 (aghyār) から心を守ることが求められる。ここでの他者とは、自分以外のものではなく、アッラー以外の全てのものを指す。

お前の心に到来するその「他者」、信仰や叡智、従順など善いものであれ、不信仰や背反など悪いものであれ—または許可された行いであれ—、その善行と悪行は違いなく、至高なる真なる御方の「観照 (shuhūd)」を阻むヴェールをお前にかけてしまうのである。なぜなら全て [他者は] 生起したものであり、生起したものは永遠なる御方を隠してしまうからである¹²。

外面の行為においてはアッラーにおける命令と禁止を遵守し、内面の心の状態においては改悛をはじめとして心を常に清らかな状態に保つことが求められる。しかし自分が達成した外面や内面の善なる状態に固執しているようでは、むしろアッラーから遠ざかってしまう。なぜなら存在論でも明らかにしたように、この世界のあらゆる事象は全て生起物にすぎず、永遠存在であるアッラー以外の生起物は根源的には無でしかないからだ。

4-2. 沈黙のズィクル

修行論においても、アッラー以外の他者を完全に退けるために修行者には意識の変革が求められている。スーフィー教団の基本的な修行法として、アッラーの御名を個人または集団で唱える祈祷 (dhikr、以下ズィクルとする) がある。このズィクルは、声を発して唱える有声のズィクル (dhikr jahri) と声を発さず心の中だけで唱える沈黙のズィクル (dhikr khafi) に大きく分かれるが、ナクシュバンディー教団は伝統的に沈黙のズィクルこそ正統な実践方法であると主張してきた¹³。

[沈黙のズィクルを行うとき] 修行者の心眼 (baṣīra) には、唱えられる御方—すなわち至高なるアッラー—以外は何も残らず、結果として至高なるアッラー以外のものは全て修行者の心眼から消え去る。果てには修行者の心眼さえも消え去るのである¹⁴。

ナーブルスィーは上記のような状態を「沈黙のズィクルの境地 (maqām al-dhikr al-khafi)」と呼ぶ。沈黙のズィクルによって至る自己の消滅とは、アッラーとの合一ではなく自らの存在の根源的無の自覚であり、アッラーの真理を忘れ、命令に逆らおうとする自我の克服である。そして低俗な自我を滅却し、アッラーの命に服しその身を捧げる人間こそが、主性の倫理 (akhlāq rabbāniya) を体現できるのである¹⁵。この境地をナーブルスィーはハディース・クドゥスィーを引用し、「私 (アッラー) によって見、私によって話し、私によって打ち、私によって歩く」境地とも呼ぶ¹⁶。ナーブルスィーは存在一性論の解説で、被造物は自己の側から見れば無であり、アッラーの側からみれば存在していると説いた。自己の目線、即ち自我によって自らの存在や行いを見つめるのではなく、アッラーの側からみれば、即ちアッラーこそが唯一の存在であることを承認し、その命に服し生きることによって初めて人間は「存在している」のである。

13 Ibrāhīm al-Kūrānī, *Maslak al-Saddād ilā Mas’ala Khalq Af’āl al-‘Ibād* (MS. Princeton: Princeton University Library, Yahuda 3862) 1b.

14 Al-Nābulusī, “Taḥrīk al-Silsilat al-Widād fī Mas’ala Khalq Af’āl al-‘Ibād,” in Samer Akkach (ed.), *Letters of a Sufi Scholar: The Correspondence of ‘Abd al-Ghānī al-Nābulusī (1641-1731)*, (Leiden and London: Brill, 2010), 61-114. Akkachは編者? 訳者? 適宜修正してください。

15 Al-Nābulusī, *Taḥrīk al-Silsila*, 76.

16 Ibid., 67.

11 Ibid., 62.

12 イブラーヒーム・クーラーニーについてはBasheer M. Nafi, “Taṣawwuf and Reform in Pre-modern Islamic Culture: In Search of Ibrāhīm al-Kūrānī,” *Die Welt des Islams* 42 (3), (2002): 307-355; Ömer Yılmaz, *İbrahim Kūrānī: Hayatı, Eserleri ve Tasavvuf Anlayışı* (İstanbul: İnsan Yayınları, 2005)などを参照。

おわりに

ここまでの議論は以下のようにまとめられる。まず『解明』におけるナーブルスィーの存在一性論は、アッラーという絶対的一者から多の世界への顕現プロセスを説くものではない。彼の存在一性論では被造物全ては根源的無であり、アッラーこそが真の存在であるという主張が徹底されている。被造物はアッラーの存在によって存在しているのであり、彼ら自身で存在しているのではない。そして、アッラーだけが真の主体的存在であるという存在論的真理は、彼の存在一性論だけでなく神学の行為論にも影響を及ぼしている。しかし、ナーブルスィーは上述の存在論的真理を理解するにはスーフィーの修行という実践が必要であるという。ナーブルスィーはナクシュバンディー教団が重視する沈黙のズィクルこそアッラーから目を背けさせる雑念を取り払い、自我を滅却しアッラーの命に服するための実践であると説く。

ナーブルスィーの存在論、神学議論、修行論を通して徹底されているのは、徹底されているのは、アッラーのみが存在するという世界観である。被造物の存在、人間の行為主体性という哲学的問題、精神を研ぎ澄まして行う修行も、それがアッラーの唯一性から目を背けさせるようなものであるならば、真理を覆うヴェールでしかない。自己の根源的無を理解し、アッラーという存在によって生かされていることを理解して初めて、人間は「存在」できる。

参考文献表 BIBLIOGRAPHY

- Al-Kūrānī, Ibrāhīm. *Maslak al-Saddād ilā Mas'ala Khalq Af'āl al-'Ibād*. MS. Princeton: Princeton University Library. Yahuda 3862. fols. 1a-29b.
- al-Nābulusī, 'Abd al-Ghanī. *al-Kawkab al-Sārī fī Haqīqa al-Juz' al-Ikhtiyārī*. Aleppo: Maṭba'a al-'Ilmīya, 1941.
- . *Īdāh al-Maqṣūd min Ma'nā Waḥda al-Wujūd*. Cairo: Dār al-Āfāq al-'Arabīya, 2008.
- . *Tahrīk al-Silsila al-Waddād fī Mas'ala Khalq Af'āl al-'Ibād* in Samer Akkach (ed.) *Letters of a Sufi Scholar: The Correspondence of 'Abd al-Ghanī al-Nābulusī (1641-1731)*. Leiden and London: Brill. 2010.
- . *Miftāh al-Ma'īya Sharḥ Risāla Ṭarīqa al-Naqshbandīya*. Beirut: Kitāb wa Nāshirūn. 2012.
- Akkach, Samer. *'Abd al-Ghani al-Nabulusi: Islam and the Enlightenment*. Oxford: Oneworld Publications. 2007.
- Çavuşoğlu, Semiramiş. “The Qādīzādeli Movement: An Attempt of şerī'at-mined Reform in the Ottoman Empire.” Ph.D. diss., Princeton University. 1990.
- Nafi, Basheer M. “Taṣawwuf and Reform in Pre-modern Islamic Culture: In Search of Ibrāhīm al-Kūrānī.” *Die Welt des Islams*. Vol. 42 (3) 2002, 307-355.
- al-Naqshbandī, Alā' al-Dīn. *Islām wa Taṣawwuf: Muṣṭalaḥu-hu, Maqāmātu-hu fī Aqwāl Kibār Mashāykhī-hi al-Ṭarīqa al-Naqshbandīya*. Beirut: al-Dār al-'Arabīya li-l-Mawsū'āt. 2009.
- Öztürk, Necati. “Islamic Orthodoxy among the Ottomans in the Seventeenth Century with Special Reference to the Qādī Zāde

- Movement.” Ph.D. dissertation, University of Edinburgh. 1981.
- Sirriyeh, Elizabeth. *Sufi Visionary of Ottoman Damascus: 'Abd al-Ghanī al-Nābulusī, 1641-1731*. New York: RoutledgeCurzon. 2005.
- Yılmaz, Ömer. *İbrahim Kūrānī: Hayatı, Eserleri ve Tasavvuf Anlayışı*. İstanbul: İnsan Yayınları, 2005.
- Zilfi, Madeline C. “The Kadizadelis: Discordant Revivalism in Seventeenth-Century Istanbul,” *Journal of Near Eastern Studies*, 45/4 (1986), 251-269.
- 松本歌郎「アブドゥルガニー・アンナーブルスィーの『存在一性論』について」『サビエンチア』第31号、1997年、429-442頁。